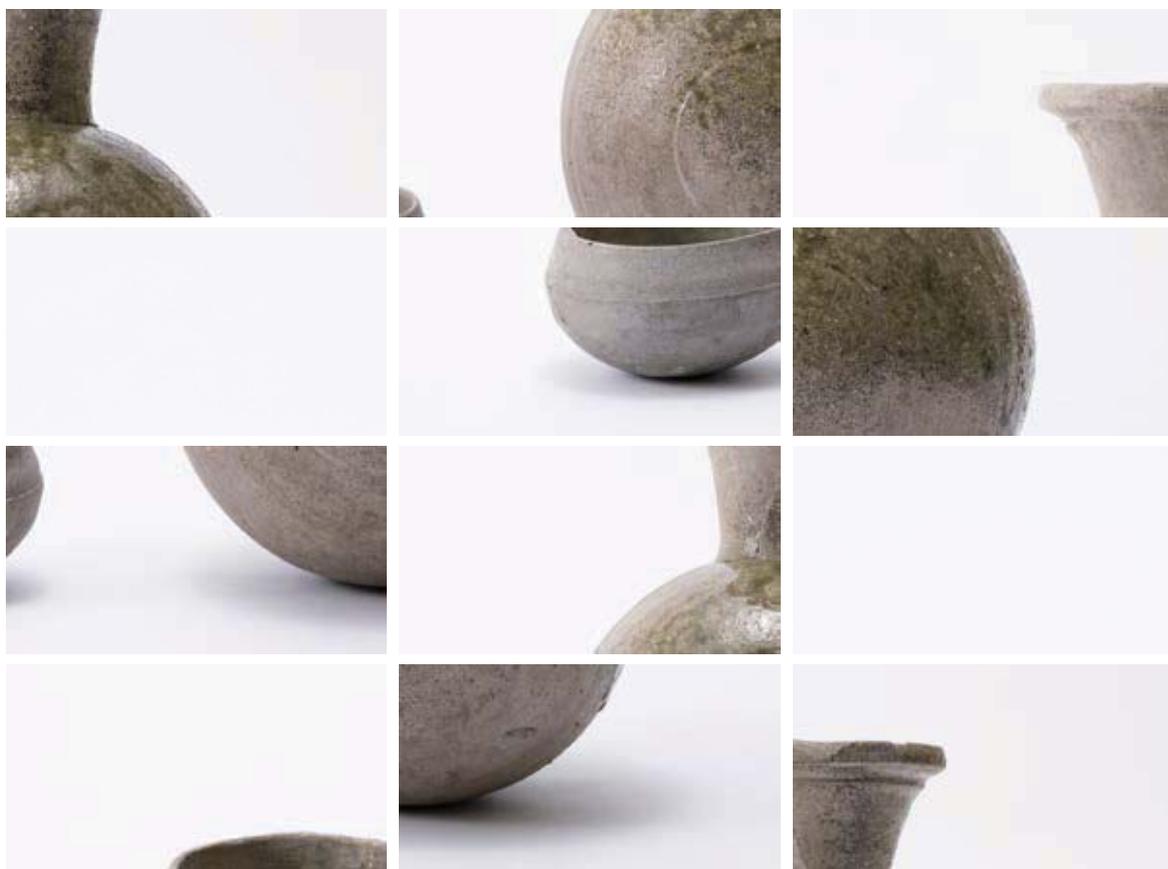


埋文ふじのみや

MAIBUN

Vol.17



ひらめきクイズブームに便乗して、ひらめきパズルを一問。12枚に分割された上の写真、ふたつの遺物が写っているのですが、何かわかりますか？おっと、切り抜いて並べ替えようとしたあなた、早まらなくても大丈夫。本紙の中に元の写真が載っているので、ページをめくって探してみてくださいね。



Vol.16 に引き続き、市内で発見された特筆すべき資料をご紹介します。思わず「えっおもしろい」「かわいい!」「フシギ～」と口にしてしまいそうなモノたち。その資料的価値の高さから、所蔵場所が市内ではないものもありますが、ぜひいつかあなたの目で見てほしい資料たちです。



茶碗 [やまぢゃわん] ※出土地不明

埋蔵文化財センターに、来歴不明の山茶碗が1点所蔵されています。山茶碗とは、中世の12世紀から14世紀にかけて岐阜県や愛知県、静岡県西部を中心に作られた焼き物です。^{ゆうやく}釉薬をかけない素焼きの焼き物で、山へ入るとごろごろ見つけたため、山茶碗という名前がついたと言われていました。食事の際のお碗などとして日常的に使われたものでした。この個体は完全な状態で所蔵されています。山茶碗は素焼きの土器で耐久性が低く、遺跡から完全な状態で見つかるのは珍しいため、この個体は遺跡から出土したものではないと考えられます。そもそも富士宮市内の遺跡ではあまり出土していません。

この山茶碗は東濃型と呼ばれる岐阜県

を中心に作られた形の山茶碗で、7型式と呼ばれる13世紀後半から14世紀初頭頃に作られたものです。白い色をしており、表面にはロクロで成形した痕があり、上部の厚さは非常に薄く、内側や外側には焼いた際に降った^{しぜんゆう}自然釉が^{もみがら}薄くかかっています。底の部分には^{もみがら}籾殻の痕が見えますが、これは焼く際に他の個体と張り付かないように籾殻を敷いた痕跡です。

この山茶碗は、誰かが何らかの目的で岐阜県から持ち込んだ、あるいは商品として何人かの手を経由して富士宮までたどり着いたもので、何百キロもの距離も、何百年もの時間も超えて我々の手元に残されたものです。



山茶碗





坏（左）と提瓶

須

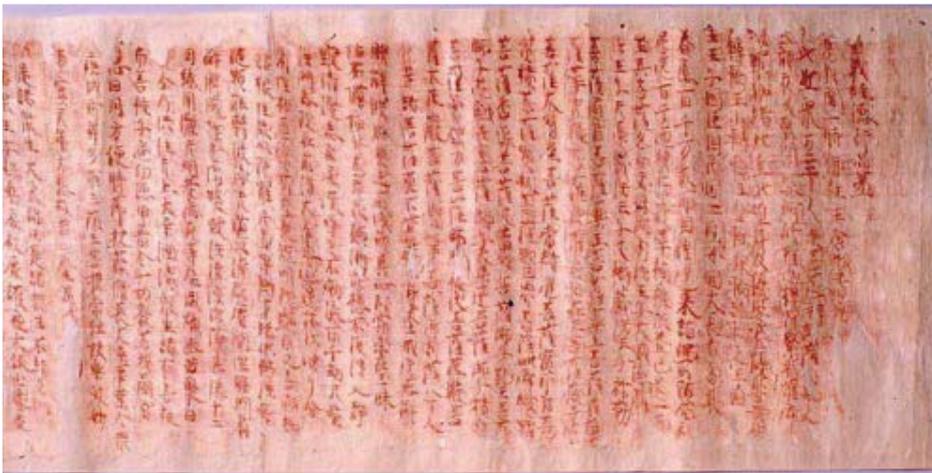
恵器の提瓶と坏 [すえきのていへいとつき] (村山浅間神社所蔵)

村山浅間神社の宝物館に収蔵されている須恵器の提瓶と坏です。いつから村山浅間神社に収められていたかは不明です。

須恵器とは、古墳時代を代表する焼物で、その技術は朝鮮半島から持ち込まれました。窯で焼かれたため非常に耐久性に優れています。提瓶とは、液体を入れる扁球の容器のことで、口が付いており水筒として使われていました。胴の形はきれいな球体をしており、半円球を2つ繋ぎ合わせてから頸部（首の部分）を付けています。頸部から延びる口はラッパ状に開いています。頸部は根元から折れていた痕跡

があり、口の部分も大部分が欠けています。外側には窯で焼かれた時に降りかかった緑色の自然釉しぜんゆうがきれいに流れています。

坏は小振りのもので、1/3程が欠けています。底の平らな部分が小さく、口の部分が段になっており、蓋があったと想像できます。両方とも湖西窯と呼ばれる浜名湖西側の窯で焼かれたもので、浜名湖西側は須恵器の一大生産地でした。提瓶は7世紀後半に作られたもの、坏は7世紀初めに作られたものです。誰かが、村山浅間神社へ信仰の意図をもって奉納したものではないかと考えられます。



お経 (左)・経巻 (下)



出土地



島ヶ嶽経塚出土遺物 [みしまがたけきょうづかしゅつどいぶつ]

三島ヶ嶽経塚は、富士山山頂、三島ヶ嶽の東側の標高 3,713m 付近にあり、昭和 5 年 (1930) 8 月に富士山本宮浅間大社 (当時は浅間神社) の奥宮参籠所建設に必要な砂礫を採取するために掘削した際に、遺物が見つかったことにより経塚として発見されました。経塚とは、お経を書き写した経巻を経筒の中に収め、焼物などの経筒外容器に入れ、それを地面に埋めたもので、平安時代の中ごろから流行しました。

三島ヶ嶽経塚が見つかった際の記録によれば、木槨による埋経施設と経筒の埋経施設の 2 つがあったとされています。出土遺物は、経巻は浅間大社で所蔵していますが、それ以

外のものは東京国立博物館に所蔵されています。出土したものは、広口壺の頸部 1 点と、山茶碗の底部破片 2 点、常滑産の甕もしくは壺片が約 4 点、渥美湖西産の甕あるいは壺片約 6 点、土師器皿片もあります。常滑は、外面に工具で叩いた痕跡の押印が見られるもの、内面にも自然釉がかかっているものがあり、渥美湖西産は外面に蓮弁文という装飾が見られるものもあります。

古文書の記録によれば、久安 5 年 (1149) に後鳥羽上皇から大般若経の經典が、富士山に埋納するため末代上人に渡されたとあります。三島ヶ嶽経塚は、この末代上人の埋納に関わる痕跡と考えられています。

※末代上人…平安時代の僧で、富士山に数百度登り山頂に大日寺を建立したとされる。



山村備蓄銭・甕 [きたやまむらびちくせん・かめ]

北山村（現在の富士宮市北山）出土と伝わる備蓄銭と、それを入れていた容器と考えられる甕かめです。東京国立博物館に所蔵されていましたが、2005年の九州国立博物館開館に際し移動され、現在まで保管されています。詳細な出土地や由来、東京国立博物館へ所蔵された経緯等は一切不明です。

中世には、銭の中央にある方形の孔に紐を通して100枚単位で束ね、それらを甕などの容器に入れ地面に埋める備蓄銭の風習がありました。その目的は、「銭のような財産を地面という安全な場所に隠して保管する」「子孫に受け継ぐ」あるいは銭自体が神聖なものと考えられており、「地面に埋めて神に返す」など諸説あります。

銭は3万枚以上入れられており、古代から中世にかけての中国銭でした。この頃の銭は、国産のものが非常に少なく、中国銭が貨幣として日本国内に流通していました。これらの銭は銅で作られているため元々は現在の10円玉の様な色をしています。年月が経つと空気中の水分

や二酸化炭素と作用し緑青ろくしょうが付着し緑色の錆になります。この資料もかなり錆が付着したものが多く、劣化して割れているものもありました。

銭が入っていた容器は愛知県の知多半島で焼かれた常滑焼の甕です。器高は47.5cm、口径36cm、底径12.8cm、肩部の最大径が46.7cmで、甕としては中型のものです。口縁部が折り返して張り付くタイプの10型式に比定され、15世紀中頃から後半に作られたものです。胴部の張りが若干弱く、釉はかかっておらず、胴部上半は灰白色をしており、胴部下半は、暗褐色をしていて、全体的に発色が悪いです。口縁部が一部欠損していますが他は目立った損傷がみられず、ほぼ完全な形で状態は非常に良好です。肩部上方にヘラで「×」の窯印が入れられており、内面の底には銭が入っていた痕跡を示す緑青が見られます。

この備蓄銭がどういう人たちのどういう意図で埋められたかはわかりませんが、当時の人々の思いが込められた資料です。





銭（手前）と甕



底に付着する緑青



「×」の窯印

バックナンバーのご案内

これまでに発行された『埋文ふじのみや』Vol.1～Vol.16は、富士宮市のホームページでご覧になれます。
合わせて、最新号も公開しています。



創刊号



Vol.2



Vol.3



Vol.4



Vol.5



Vol.6



Vol.7



Vol.8



Vol.9



Vol.10



Vol.11



Vol.12



Vol.13



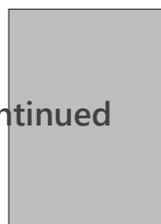
Vol.14



Vol.15



Vol.16



to be continued

富士宮市埋蔵文化財センター

ご利用案内

所在地 〒419-0315
静岡県富士宮市長貫 747-1

電話 0544-65-5151
FAX 0544-65-2933
E-mail maibun_center@city.fujinomiya.lg.jp

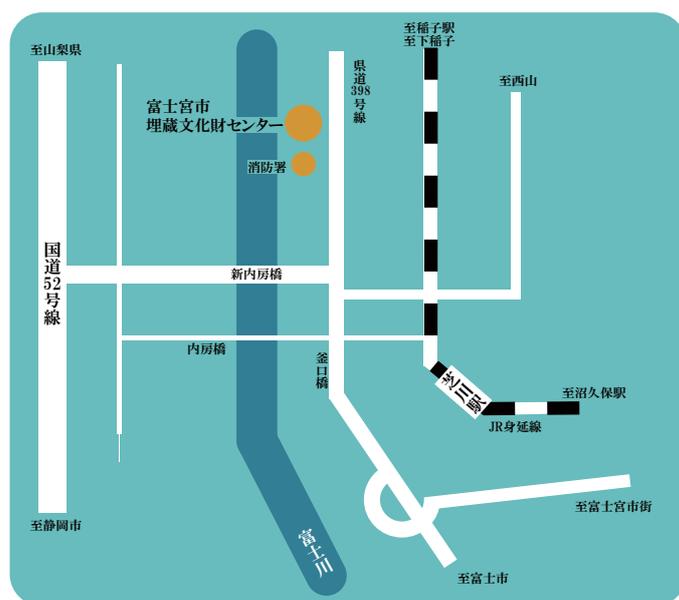
展示室 平日
開館日 * 祝日及び年末年始（12月28日～1月3日）は休館

開館時間 9:00～17:00（入館は16:30まで）
* 埋蔵文化財センターの業務時間は
8:30～17:15

見学料 無料
駐車場 あり（無料）



交通案内



富士宮市埋蔵文化財センターだより
埋文ふじのみや Vol.17

令和4年6月
編集／発行 富士宮市埋蔵文化財センター